

パピアメント語に接続法 があるのか？

パトリシオ バレラ アルミロン

本発表の流れ

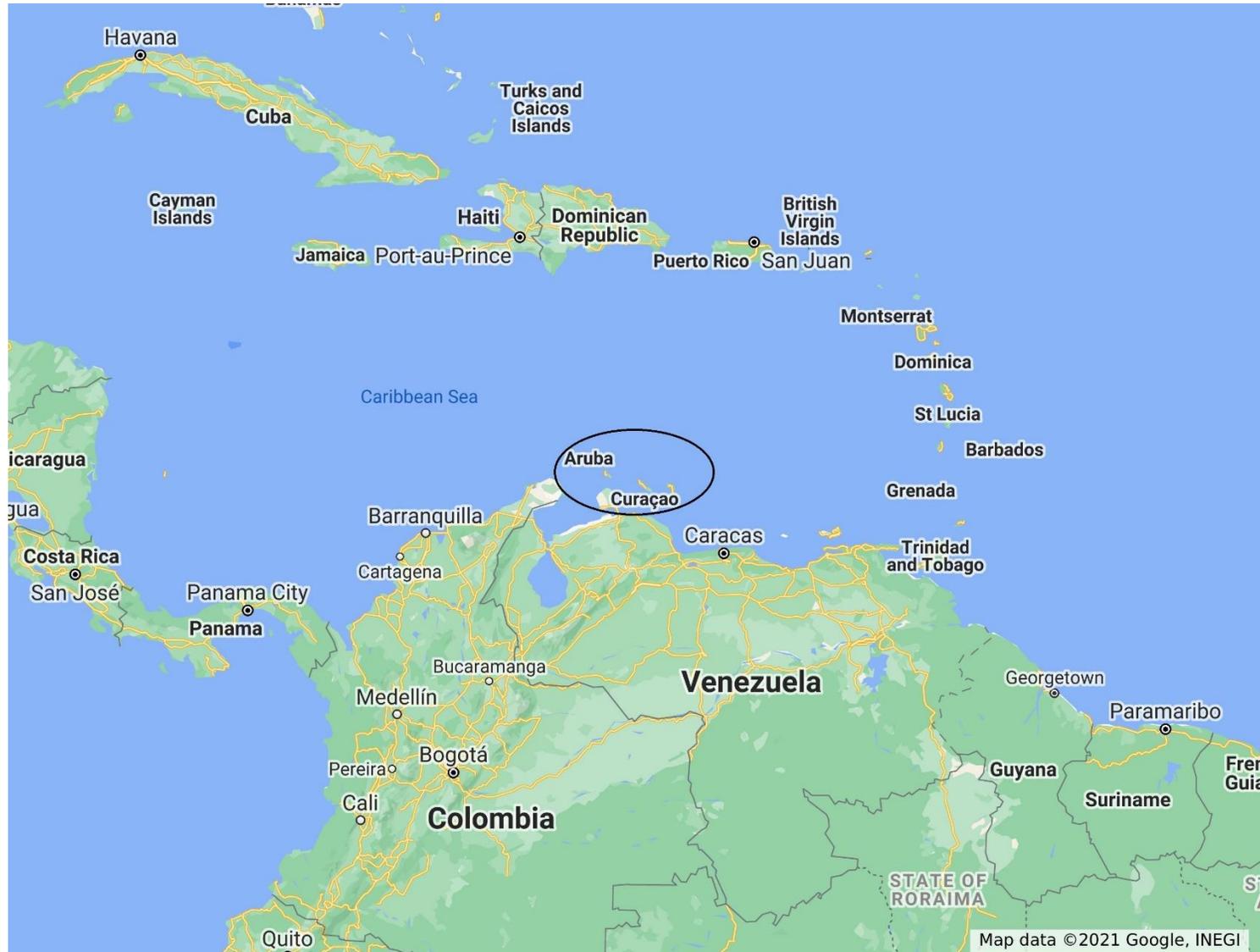
0. パピアメント語に関する背景知識
1. 先行研究におけるパピアメント語のTAM
2. 接続法のゼロ標識を立てる問題点
3. 調査
4. 結論

0. パピアメント語に関する背景知識

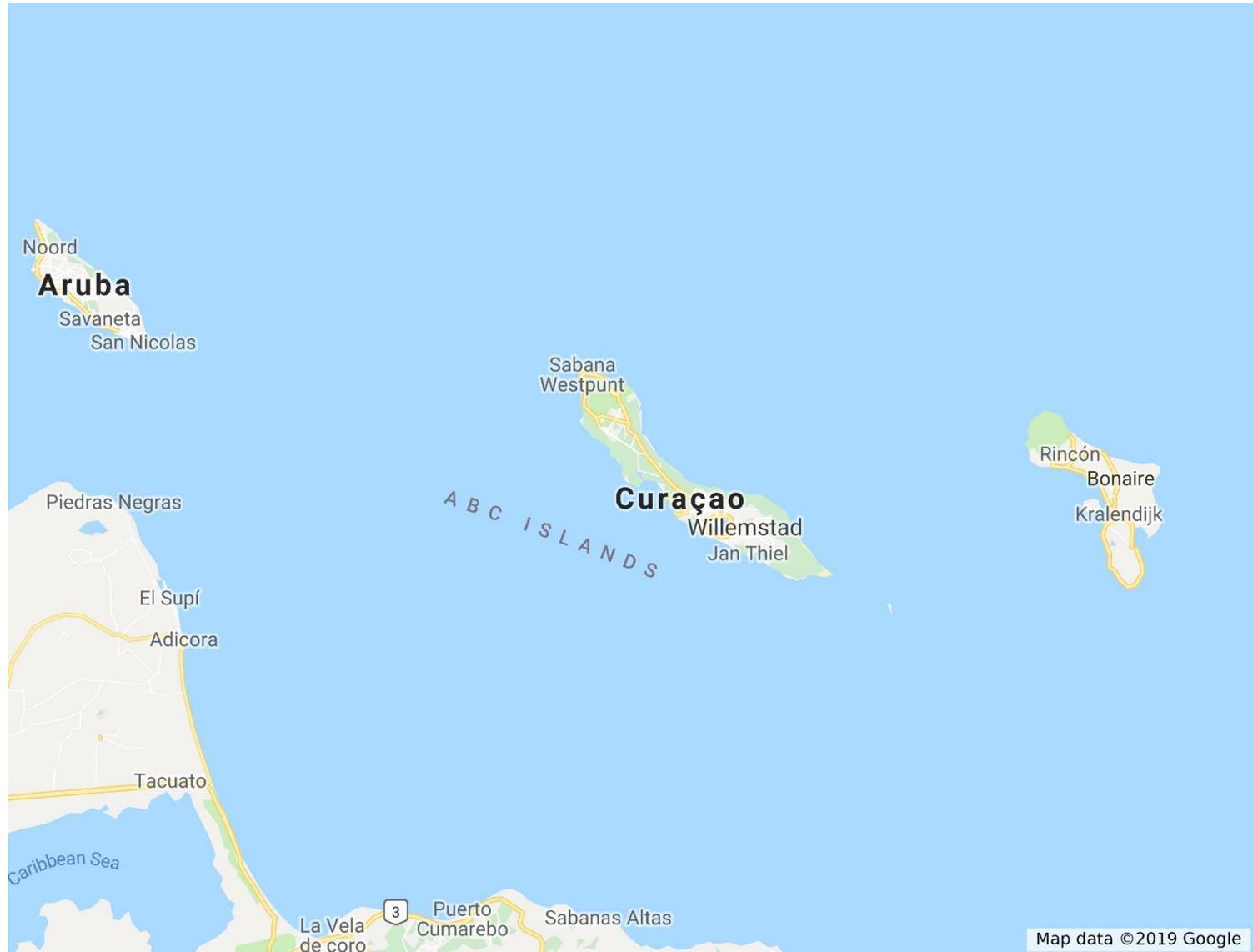
パピアメント語とは

- パピアメント語はカリブ海、オランダ領アンチル諸島を構成する、キュラソー島（英語名: Curaçao）、ボネール島（英語名: Bonaire）、アルバ島（英語名: Aruba）で話されるスペイン語語彙系クレオール言語である（細川 1989: 215）。
- それぞれの島では異なる正書法が用いられる（厳密にはボネール島では正書法は決まっていない）。本発表では便宜上、音素表記に近いキュラソー島の正書法を用いる。

ABC諸島の位置



ABC諸島の位置



パピアメント語の語順

Kouwenberg and Murray (1994: 35) による：

- パピアメント語の基本語順は厳格なSVOであり、間接目的語は直接目的語に先行する。
- yes/no 疑問文は肯定文と同じ語順を持ち、最終音節でピッチが上がる。疑問詞疑問文の場合は、疑問詞が文頭に来る。
- 否定は主に動詞前に現れる no によって表される。
- TAMは動詞の前に現れるTAM標識によって表される。

1. 先行研究におけるパピアメント語の TAM

- 1.1. Andersen (1990) ではによるパピアメント語の TAM 標識および時間的な関係を表しうる本動詞を概観する。
- 1.2. Maurer (1993) では接続法を表すとされているゼロ標識 (\emptyset) の機能と例をみる。
- 1.3. Kouwenberg and Lefebvre (2015) では補文標識 *pa* に導入される節と TAM の関係をみる。

1.1. Andersen (1990)

TAM標識

- Andersen (1990: 67)はパピアメント語のTAM標識および時間的な関係を表しうる本動詞を次のようにまとめている。

1a) テンス・アスペクトを表す標識

ta (imperfective)

Wan ta kome bonchi
PN IPFV eat bean

"John eats/is eating beans"

a (perfective)

Wan a kome bonchi
PN PFV eat bean

"... ate/has eaten/had eaten ..."

TAM標識

tabata (past imperfective)

Wan tabata kome bonchi

PN IPFV.PST eat bean

"... was eating/used to eat ..."

sa (habitual)

Wan sa kome bonchi

PN HAB eat bean

"... usually eats ..."

TAM標識

1b) ムードを表す標識

lo (irrealis)

Wan lo kome bonchi

PN IRR eat bean

"John will eat beans"

∅ (subjunctive)

(si) Wan ∅ kome bonchi

if PN SBJV eat bean

" (If) John eats beans, ..."

時間的な関係を表しうる本動詞

2a) 法助動詞 (Modal Auxiliaries)

ke "want"

Wan ke kome bonchi

PN want eat bean

"John wants to eat ..."

por "can/may/might"

Wan por kome bonchi

PN can eat bean

"... can/may eat ..."

時間的な関係を表しうる本動詞

mester "must/should"

Wan mester kome bonchi

PN must eat bean

"... must/should eat ..."

準法助動詞 (Quasi-modal Auxiliaries) および完了を表す副詞 (Completive Adverbial) は割愛。

1.2. Maurer (1993)

- Maurer (1993: 243-244) によると、接続法のゼロ標識の意味は [- assertive, - temporal] であり、「関係節では、修飾されている名詞が指す人物・ものは話し手にとって未知であり、その存在は可能性としてしか断定されない場合に用いられる」という。
- Maurer (1993) のTAM標識の分類はAndersen (1990) とは異なる。以下表1にMaurer (1993: 243) の分類を挙げる。

表1: Maurer(1993) によるTAM標識の分類

MARKER	LABEL	BASIC MEANING
<i>lo</i>	futuro	[+ posterior]
<i>ta / (∅)</i>	presente	[+ simultaneous]
<i>a</i>	perfekto	[+ anterior, + perfective]
<i>tabata / taba</i>	imperfekto	[+ anterior, + imperfective]
<i>∅</i>	suphuntivo	[- assertive, - temporal]

- 接続法はほかに関係節に修飾された名詞の総称的参照 (generic reference) を表すのに用いられることもある (Maurer 1993: 244)。

(1) *e* *muhé* *ku* \emptyset *entregá* *su*
 ART.DEF woman that \emptyset surrender 3SG.POSS
mes *na* *un* *blanku* *abuzador*,
 self to ART.INDEF white abuser
ta *kometé* *prostitushon*
 IPFV commit prostitution

"Any woman who surrenders herself to an abusive white man commits prostitution."

(Maurer 1993: 244)

- 接続法のゼロ標識は主節の時間的参照は過去である場合にも同じように用いられる (Maurer 1993: 244)。

(2) *e* *awa* ***tabata*** *asina* *dushi* *ku*
 ART.DEF water IPFV.PST so sweet that
tur *loke* *nan* \emptyset *planta* *tabata* *bona*
 all what 3PL \emptyset plant IPFV.PST grow

"The water was so sweet that whatever they planted would grow"

(Maurer 1993: 244)

- 関係節にゼロ以外のTAM標識が用いられる場合は名詞が特定であり、その存在が完全に断定されることを含意する (Maurer 1993: 244)。

(3) *esun* *ku* ***lo/ta/a/tabata*** *toka* *tre*
 the.one that IRR/IPFV/PFV/IPFV.PST play tre
a *dirigí* *palabra* *na* *mi*
 PFV direct word to me

"The one who will play/plays/played the "tre" spoke to me"
 (Maurer 1993: 244)

- 空間・様態を表す副詞節においても接続法のゼロ標識は総称的参照を表す(Maurer 1993: 245)。

(4) *unda ku nan Ø bai, tur hende*
where that 3PL Ø go all person
mester bolbe tende e mesun kansion
must return hear ART.DEF same song

"Wherever they go, everybody must hear the same story again and again"

(Maurer 1993: 245)

- 譲歩節で接続法のゼロ標識は、その出来事が仮定的であることを示す。それに対し、ほかのTAM標識はその出来事が事実であることを示す(Maurer 1993: 246)。

(5) ***Maske*** *nan* \emptyset *dun=ele* *kuminda*
 although 3PL \emptyset give=3SG food
e=n *ta* *kome*
 3SG=NEG IPFV eat

"Even if they were to give him something to eat, he wouldn't eat"

(Maurer 1993: 246)

(6) ***Maske*** *bo ta sinti falta di espasio,*
 although 2SG IPFV feel need of space
bo ta bira ferdrit ora e
 2SG IPFV become sad when ART.DEF
mucha=nan kuminsá bai
 child=PL start go

"Though you need more space, you get sad when the children start to leave"

(Maurer 1993: 246)

- 補文標識paに導入されている節には接続法のゼロ標識が用いられる。

(7) *e* *ke* *pa* *nan* \emptyset *bai*
3SG want for 3PL \emptyset go

"He wants them to leave"

(Maurer 1993: 247)

- 補文標識paに導入されている節においてTAM標識のa, tabataは非現実機能 (irrealis function) をもつ。

(8) *Hose ke pa Ramon a bai*

PN want for PN PFV go

"Hose wishes that Ramon were gone"

(Maurer 1993: 247)

1.3. Kouwenberg and Lefebvre (2015)

補文標識paに導入される節に関して

- Kouwenberg and Lefebvre (2015)はパピアメント語のku, pa, diという補文標識に導入される節の特徴について述べている。
- Kouwenberg and Lefebvre (2015: 295)によるとpa節において非現実のTAM標識loを用いることができないという。

(9) **mi* *ke* ***pa*** *bo* *lo* *bai*
1SG want for 2SG IRR go
[Lit.: "I want that you will go"]

(Kouwenberg and Lefebvre 2015: 295)

- pa節にはTAM標識のa, ta, tabataを用いることは可能である (Kouwenberg and Lefebvre 2015: 295)。

(10) *Hose ke pa Ramon a bai (kaba)*
PN want for PN PFV go (already)

"Jose wishes that Ramon were gone"

(Kouwenberg and Lefebvre 2015: 294)

2. 接続法のゼロ標識を立てる問題点

第一問題：Maurer (1993) による接続法の定義

- Maurer (1993) はパピアメント語の接続法の特徴を[-assertive, -temporal] としつつも、非現実とは異なるカテゴリとして扱っている。
- ムードとモダリティに関して述べているPalmer (2001: 107) によると、「直説法・接続法」および「現実・非現実」はどちらもRealis/Irrealisの実現したものである。
- 「接続法」という用語を用いると、それ以外の標識が「直説法」を表していることを含意している（「直説法・接続法」の違いは述語に必ず現れるはず）。

第二問題：Maurer (1993) はloを未来の標識としてとらえている

- Maurer (1993) はloが未来の標識として立て、a, ta, tabataと同じ扱いをしている。しかし、loは単独で動詞を先行する場合は未来と解釈されてもa, ta, tabataと共起し、非現実を表すこともある。

(11) Mi **lo** **a** bai
 1SG IRR PFV go
 "I would have gone"

- Palmer (2001: 187)によると、非現実を表す形態素が未来も表すことがあるため、loを「非現実」の標識と分析したほうが妥当であろう。

第三問題：Maurer (1993) はloがほかのTAM標識と違う位置を占めることに気づいていない

- (11)のように、loはほかのTAM標識と共起できる。その場合の順番は[lo + ほかのTAM標識] となり、その逆の順番は非文となる。このことからloがa, ta, tabataとは別のカテゴリを示すことも統語的に表されていることが分かる。

明らかにすべきこと

- このことから、もしも「接続法」などのカテゴリを表す形式が存在するなら、ムードのloと何らかの形で対立しているはずである。そのため、調査でMaurerが挙げている例のような文脈において有形の形態素が用いられていないものと、loが用いられているものを比べ、loとゼロが対立しているのか、そもそもゼロがないのかを明らかにしたい。

3. 調査

- 3.1.では調査方法を説明する。
- 3.2.では調査結果を示す。

3.1. 調査方法

- Leipzig Papiamentu Corpus、発表者が集めたパピアメント語の口語データ、文語データ、Maurer (1993)から集めた用例を分析し、場合によってインフォーマントのJ.C. (パピアメント語母語話者。キュラソー島出身地。1990根生まれ。男性) に意味の説明をしていただいた。文を一部変え、J.C.に許容度を訪ねたものを含む。

口語データ： Djis un tiki loveというドラマの書き起こし。延べ語数は約4万語。

文語データ： Èxtraという新聞の5部。延べ語数は約121,300語。

3.2. 調査結果

pa節とloに関して

- J.C.に尋ねたところ、Kouwenberg and Lefebvre (2015)の主張通り、pa節においてloを用いることができない。以下の(12)は許容されなかった作例である。

(12)

<i>*Mi</i>	<i>ke</i>	<i>pa</i>	[<i>e</i>		<i>lo</i>
<i>bai</i> / <i>lo</i>	<i>e</i>			<i>bai</i>]		
1SG	want	for	3SG	IRR		go
IRR	3SG	go				

- このことから、pa節にはムードの標識が入れないと考えてもよい。つまり、ゼロは何らかの対立を示しているとは思えない (=ゼロがない)。

譲歩節におけるloに関して

- maske “even” を用いた節でloが現れる例があった。

(13) *Pauw ta bisa (...) ku maske*
PN IPFV say that even
e dos hungadó=nan lo ta hunga-ndo
ART.DEF two player=PL IRR IPFV play-GER
den forma ekselente, e no por mantené
in form excellent 3SG NEG can keep
nan den e selekshon
3PL in the selection

"Pauw says (...) that regardless of both players playing in top condition, he cannot keep them in the team"

- (13) では *lo* が、「もしも~だとしても」という仮想の出来事について述べるのに用いられている。この意味合いはニュースで断言しないほうがいい場合に多用される (14)。

(14) (...) *esaki lo a sosode* (...) *despues di*

this IRR PFV happen after of

ora ku e lo a

when that 3SG IRR PFV

haña un bati formal

find a beat heavy

"(...) this happened (...) after she received a heavy beat-up"

- これらの場合はJ.C.によると、loおよびその他のTAM標識を用いないと、「一般的にそうなる」といった解釈になる。つまり、これはMaurer (1993) のいう「総称的参照」であるといえる。ただし、非現実を表す標識はloのみとなっており、標識がないことはloと、loとは違う位置を占めるa, ta, tabataの両方と対立しているとは考えにくい。もしもそうであればloと対立するゼロとその他のTAM標識と対立するゼロを立てなければならない。

モダリティの二重表現

- 抽出した用例には *lo* が法助動詞と一緒に用いられる例があり、法助動詞と *lo* が同じ意味合いを加えていると考えられる。J.C. によると、*lo* のみを使ったほうが自然であるという。

- (15) *mi ta duda ku un dia boso lo*
1SG IPFV doubt that a day 2PL IRR
por sa kiko esei ta signifika
can know what this IPFV mean

"I doubt that some day you will now what it means "

4. 結論

- loは従属節において必ず「非現実」の意味を表す。テンス・アスペクトの標識と一緒に用いることができ、確かでない出来事を述べる際に用いられる。
- パピアメント語にゼロを立てるには、loと対立するものとa, ta, tabataと対立するものを考えなければならないという問題が生じる。さらに、ゼロがloとは異なる「非現実」を表しているとは考えにくい。むしろ、動詞がTAM標識なしで総称的な解釈となると考えたほうが妥当であろう。
- pa節に関してもloが用いられないため、ゼロはloと対立しているとは考えられない。a, tabataを用いた場合はaとtabataにMaurer (1993) 曰く「非現実」の機能があるため、その非現実と対立する接続法に何の意味があるのかは不明である。そのため、この場合もゼロを立てないほうが妥当であろう。

- 「接続法」を立てるなら、それ以外のa, ta, tabataが「直説法」を表さなければならない。しかし、これらは非現実のloと一緒に用いられうるためその分析が不可能になってしまう。
- loは非現実を表すが、法助動詞por “can”（一部mester “must”も）と一緒に用いられ、どれも同じ機能を果たしていると考えられる用例が見つかった。これはloの機能の希薄化、もしくは法助動詞の機能の拡張を示しているものかもしれない。なお、この用法は例が少なく、文語のみに見られたためパピアメント語全体に及んでいる変化でないかもしれない。

ご清聴ありがとうございました



参考文献

- Andersen, Roger William (1990) 'Papiamentu tense-aspect', in Singler, John Victor (1990) *Pidgin and creole tense-mood-aspect systems* pp. 59-97. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 細川弘明 (1989) 「パピアメント語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典第3巻』 215-216. 東京: 三省堂.
- Kouwenberg, Silvia and Eric Murray (1994) *Papiamentu* (Languages of the world/Materials 68) München: Lincom Europa.
- Kouwenberg, Silvia and Claire Lefebvre (2015) " A new analysis of the Papiamentu clause structure", in Lefebvre, Claire (2015) *Functional Categories in Three Atlantic Creoles: Saramaccan, Haitian and Papiamentu* pp. 283-315. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Maurer, Philippe (1993) 'subjunctive mood in Papiamentu" in Muysken, Pieter (ed.) (1993) *Atlantic meets Pacific* pp. 243-250 Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Palmer, Frank Robert (2001) *Mood and Modality* Cambridge: University Press.